

「篠崎先生の手紙（石川倉次先生へ）」

北海道函館聾学校 校長 門 眞 義 弘

本校の校長室の前には、過去の貴重な資料が展示してあります。その中の1つに、本校初代校長の篠崎清次先生が石川倉次先生に書いた手紙が飾られています。石川倉次先生は、点字翻訳者として有名な先生ですが、聴覚障がい教育にも貴重な示唆を残された方です。現在にも通じるその教えは、私たちの心に刻みたいと思います。 （※本校では、聴覚障がい教育をはじめて120年目（令和4年度）を記念して校地に桜の木を5本植樹しています。）

◎ 日本で何番目にできた？

函館聾学校は、日本で何番目にできたのでしょうか？答えは、創立年では「3番目」です。

1番目が、筑波大学附属聴覚特別支援学校。

2番目が京都府立聾学校で、その次です。

学 校 名	本・分	設置年月日
筑波大学附属聴覚特別支援学校	本校	1875/5/
京都府立聾学校	本校	1878/5/24
北海道函館聾学校	本校	1895/10/1
愛知県立豊橋聾学校	本校	1898/2/11
長崎県立ろう学校	本校	1898/6/9
大阪府立中央聴覚支援学校	本校	1900/9/13
愛知県立名古屋聾学校	本校	1901/11/1
鹿児島県立鹿児島聾学校	本校	1903/2/2
長野県長野ろう学校	本校	1903/4/1
愛知県立岡崎聾学校	本校	1903/6/11

令和元年度 全国聾学校長会 資料

しかし、「聴覚障がい教育をはじめた年」で見ると順番が変わります。明治11年にはじめて聴覚障がい教育をはじめたのは、京都府立聾学校で日本で一番古い聾学校ということになります。筑波大学附属聴覚特別支援学校は明治13年にはじめたので2番目です。次に、何ヶ月かの差で豊橋、長崎の順になり、次に大阪府立中央、そして名古屋（明治34年）、その次の年に函館聾学校が聴覚障がい教育をはじめました。

- 1 京都府立聾学校（明治11年）
- 2 筑波大学附属聴覚特別支援学校
- 3 愛知県立豊橋聾学校
- 4 長崎県立ろう学校
- 5 大阪府立中央聴覚支援学校
- 6 愛知県立名古屋聾学校
- 7 北海道函館聾学校（明治35年）

ろう教育の草創期に活躍したのが石川倉次先生です。



←【石川倉次先生】

日本点字の父と呼ばれる石川倉次先生は、1859(安政6)年浜松に生まれ、1879(明治12)年、千葉師範学校を卒業後小学校を歴任、小西信八に再三請われ1886(明治19)年訓盲院に着任した。当時盲人は凸字によって教育を受けていたが、小西信八からブライユ点字の翻案を奨められ、生徒らと共に3年間の苦心研究の結果ようやく完成した。小西校長外遊中は、校長事務代理を務めた。1909(明治42)年の盲聾分離に当たっては、小西と共に聾啞学校に残ったが、兼任して盲教育に引き続いて関わった。1944(昭和19)年12月逝去。

↑※筑波大学附属視覚特別支援学校 HP より抜粋

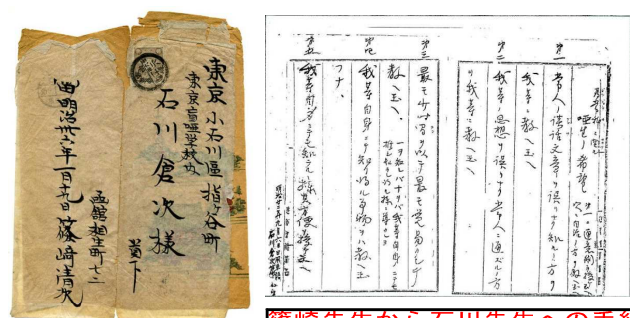
◎ 今に通じる「啞生の希望」とは

石川先生は、日本の点字を作った方でもありますが、聾教育に関しても多大な功績を残しています。明治22年に『日用単語』という著作（基礎語彙集）の中で、教員の心構えを説いています。それが『啞生の希望』です。その心構えは、今にも通じる大切な教えです。

（ちなみに現代では「啞生」という用語は不適切かつ不要です。）

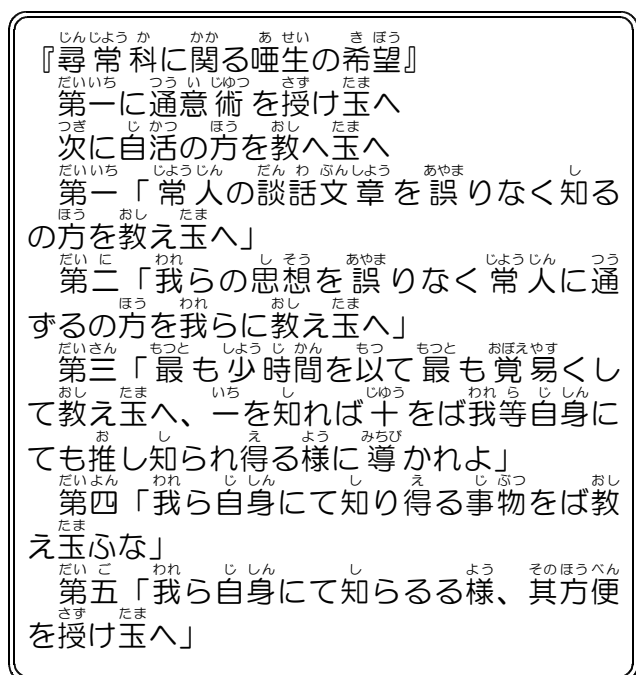
明治13年に東京で始まったろう教育は、石川倉次先生の精神を受け継いで22年後の明治35

年に、本校初代校長の篠崎清次先生によって函館ではじめられたのです。



篠崎先生から石川先生への手紙
(校長室前の展示)

「生涯の希望」とは、どのような内容が書かれていたのでしょうか。



第1は、周りの人たちが話したり、書いたりしていることを自分たちが正確に理解する方法を教えてほしい。

第2は、自分たちが考えていることを周囲の人たちに正確に伝える方法を身に付けさせてほしい。

第3では、ことばは身の回りにたくさんあることから、それらをひとつひとつ教えてもらっては時間が足りないので、少ない時間で効果的に教えてほしい。

具体的には、ひとつわかれば、それを基に自分でさらにことばを獲得していけるような教え方をしてほしい。(※自学自習と習得)

第4では、自分自身で見ることでできる事柄については教えてくれなくてもいいので、聞かえにくいことが理由で、気が付きにくいことを丁寧に教えてほしい。

第5では、いつも教えてもらうだけでなく、自分から知ることができるよう、その方法を身に付けさせてほしい。

知識ばかりを教えるのではなく、なぜそのように考えるのか、あるいは、どうやったら身に付けることができるのかなど、子どもたちが自ら学びを深めていくための指導法の追求につながると考えられます。

本校の子どもたちには、自ら学ぼうと学習に取り組み、新しい知識や新しい考え方に触れ、それを受け入れ、しっかりと自分の考えをもち、世界を広げていける人間に育ってほしいと願っています。そのためにも、子どもたちにかかわる我々大人は、様々なことに留意して子どもたちの成長をサポートし、指導していかなければなりません。石川先生が言っていることは、学校における指導の場面でも、家庭における子育ての場面でも、普段から気を付けなければならないことではないでしょうか。

知・徳・体のバランスのとれた学力を身に付け、学ぶ喜びを知り、生涯にわたって学び続けていく子どもたちに育って欲しいものです。

今から130年程前に、このような境地に立たれ、不易なものを今に伝えてくださっていることに驚き、感動を覚えます。

このような不易なことを大切に、この教育にかかわる全てのひとと、そして、この地域の皆様とともに学びながら新しいことにチャレンジしていきたいと思っています。



※筑波大学附属聴覚特別支援学校 HP より

石川倉次先生(1858～1945)は、聾児のための多くの教材を作成しています。指導実践をもとにまとめられた文法事項や発音の指導順序を記載した教材(「国語教順」等)は、現代の指導にもつながるものです(「東京教育大学附属聾学校の教育—その百年の歴史—」より)。